

浮世絵は文字どおり「浮世を描いた絵」と呼ばれ、17 世紀半ばから始まり人気を博したジャンルであり、木版画と肉筆画に分けられる。「浮世」とは、「現在、当世」という意味をもつ言葉であったが、江戸時代（1603-1868）を通じて人気のあった遊興娯楽の場所を表現する言葉として使われるようになった。従って浮世絵は庶民の日常を描き始め、特に江戸の町（今の東京）界隈に住む人々が描かれた。

浮世絵には多くの異なる対象が描かれたが、多くの版画は美人画、役者絵（歌舞伎役者の肖像）であった。これらの浮世絵は版画によって大量生産され、比較的安価であったこれらの版画は、それらを購入した商人や下級武士の興味を反映していた。その他、相撲の力士や戦士、風景、そして自然の風景などを描いた版画も人気があった。人物の誇張画、奇想天外な画、春画も多かった。こうした浮世絵の製作には高度な技術が求められた。どの版画も通常印刷する人、版木を彫る人、絵の具を調合する人のチーム作業で行われた。大部分の浮世絵は輪郭が鮮明で、鮮やかな色彩で人々の目を惹きつけるものであったが、印刷は非常に難しかった。

萩浦上美術館には、木版の浮世絵を 5,500 点以上も所有しているが、毎月テーマ別に約 30 点を選定し、展示公開している。このコレクションの中には、北斎、歌麿、写楽、広重等浮世絵の有名作家の作品も含まれている。このコレクションは、浮世絵の歴史の始まりから終わりまでを網羅しており、浮世絵を研究し始めたばかりの人々にとって貴重な情報源となっている。